

佳作

当たり前

福島県須賀川市立第一中学校

3年 管野 大悟

中学校最後の夏休み。それだけで特別だ。とにかくいろいろあった。忘れないうちに記録して未来の自分に読ませたい。「夏を制するものは受験を制す」と言われ、本気で勉強に取り組み始める時期でもある夏休み。中学3年生なら誰だって大切にしたい時期に決まっている。僕だってそうだった。

話は夏休みの前にまでさかのぼる。それはもう忙しかった。10月の文化祭にむけて、いろいろな準備が始まったからだ。実行委員の僕は一層忙しかった。そんな落ち着かないある日の午後。その日はあるプリントが配られた。それは合唱部が特設になったことと、部員を募集する、という二つのことを伝えるものだった。というのも合唱部は僕が入学した年、部員が集まらなかったことで、一度廃部のようになってしまっていた。それが今年特設という形で復活し、部員の再募集がされたわけだ。季節はずれの部員募集には、こんなわけがあったのだ。活動内容も少し特殊で、夏休み中の8月10日にある大会を目標にして活動し、その大会が終わったら練習はなくなる。つまり「ひと夏限りの特別な部活」というわけだ。先生が合唱部の勧誘のためクラスに来たとき、入るかどうかがかなり悩んだ。最初のほうは「みんな勉強とか忙しいだろうし入る人なんていないだろう」と思っていた。実際周りで入ると言っている人は、ほぼいなかった。しかし少し興味があったし、自分が入学した年に新入部員が入らなかったせいで、一度廃部になりかけていることを考えると罪悪感というか、申しわけなさがあった。入部を考える理由は多々あったが、最後の一押しになったのは「文化祭の伴奏」だ。

文化祭では全学年クラス対抗の合唱コンクールがあり、伴奏者が必要になる。基本はピアノを習っていた人に任される。クラスでピアノを習っていたのは僕を含め3人。僕はピアノの伴奏を絶対にやりたくなかった。なぜなら夏休み中にピアノはきっぱりやめると決めていたからだ。そこで合唱部に入ることで伴奏を断る理由をつくらうとした。しかし二人は「ピアノもう辞めたし」「成績落ちたから勉強したい」なんて言う。話し合いは放課後まで続いた。そのころには話し合いというより我慢比べになっていた。我慢比べは1時間ほど続いた。最初に白旗を上げたのは僕だった。僕は同時並行で物事を進めるのが苦手だ。それなのに、合唱、伴奏、勉強の三つを同時に進めなければいけなくなってしまった。「どうしてこうなった」がぴったりの一日だった。

やる気がでない。いつもの通学路がやけに長く感じる。そんなことを考えつつ、重い足を引きずって最初の合唱部へと向かった。合唱部に男子部員は二人のみ。もう一人は友達だ。わかっていたが一人で行くとなるとなかなか勇気がいる。それでも初めが肝心と音楽室のドアを勢いよく開け「おはようございます」と元気よく言った。あいさつではなく、沈黙が返ってきた。なにごともしなかったかのように自分でいすを出して座り、静かに友達を待った。友達が来るまでの数分が永遠に感じた。友達と合流し、あとは先生を待つだけになった。正直、不安で家に帰ったらしなくてはいけないことを考えると、練習が面倒くさかった。そして練習ははじまった。

練習はさっきまでの静けさと自分の失敗を忘れるほど楽しかった。「3時間もある」が「3時間しかない」に変わるほどだ。歌声と笑い声の絶えない3時間だった。それからの練習も毎日が楽しかった。たまに億劫に感じることもあったが、一度歌えば気にならなくなった。そんな練習を重ねてむかえた本番の日。午前の練習、午後のリハーサル。そしてステージ。そこからの景色は言葉では表せないほどだった。スポットライトは自分たちを海外のスターのように照らしてくれた。観客は多くはなかったが、歌声が届くように精いっぱい声をとばした。なによりも歌うことが心から楽しかった。こうして夏の澄んだ青空のような清々しい気持ちで大会を終えた。

夏休み中、最初は嫌だったけれど最後には笑えた。そんな体験を何回もした。その逆もあった。けれど両方ともやってみて後悔はなかった。この波乱万丈だった夏休みで学んだことは「やってみないとわからない」ただそれだけ。至極当たり前のことだ。しかし当たり前すぎて忘れてしまっていた。

何かを始める時、必ず最初は勇気がいる。しかし勇気を出して一歩進めば、今までとは違う新しい世界が見えるはずだ。この夏休みの黄金のような体験は生涯忘れないだろう。これから何かを始める時「やってみないとわからない」この言葉がきっと背中を押してくれる。未来の自分にも当たり前のことこそ、忘れないでほしいと願う。